

浜のくらしと祭り (第1報)

——繰糸祭・お糸船神事より——

古川智恵子・小川由香

Life on the Seaside and the Festival (I)

On Kuriito- and Oitobune- Festival

Chieko FURUKAWA and Yuka OGAWA

緒 言

本研究は、「浜のくらしと祭り」をテーマに、三河湾をめぐる海村地域の人々の生活と祭りとのかかわりや、祭りの装束について調査し、海に生きる人々の信仰がいかに培われ、それが生活にどのように機能してきたかという視点に立って探求することを目的とする。今回の第1報では、渥美町亀山で行なわれた衣に関する祭祀の繰糸祭およびお糸船神事について調査報告を行なう。

方 法

昭和62年6月22日、渥美町亀山、御糸宮(神宮神御衣御料所)で行なわれた繰糸祭および同年7月3日、渥美町伊良湖港で行なわれたお糸船神事について、聞き取り、写真撮影等の調査を行なった。そこで得られた資料をもとに、文献資料とも併せ、海村の人々の生活と祭りとのかかわりについて考察する。(図1参照)

結果および考察

1. 繰糸祭・お糸船神事の由来・歴史について

繰糸祭およびお糸船神事は、伊勢神宮で毎年春と秋の二回行なわれる^{かんみそ}神御衣祭のための神衣の材料を献上する儀式である。渥美町亀山にある御糸宮で繰られた絹糸を伊良湖港より鳥羽港へ運び、伊勢神宮に奉獻する。その神衣の材料とは、「赤引糸」と呼ばれる清浄な生糸であり、「赤引糸」の「赤」とは、清浄とか誠意の意味をあらわし、神宮の御用に供される絹糸にのみこの名がつけられた。そしてこの赤引糸は、古くから三河国より献上されていたと言われ、「延喜式」にも、三河国は上糸国、すなわち上質の絹糸を産する地方として記されている。養蚕業においては、上・中・下の三段階に分けられて、その上の部に位置づけられていたのである。また、距離的には、伊良湖・鳥羽間は二十数キロメートルほどであり、三河国は古くから伊良湖と政治・文化の交流が盛んに行なわれたところである。以上の二点から考えても三河国の絹糸が、赤引糸として伊勢神宮に献納されるようになった理由がうかがわれる。ただし、伊勢神宮が現在の地に鎮座した^{当時}は、絹糸を大和の国から調達していたと言われている。したがって、三河国の赤引糸が神御衣御料として用いられるようになったのは、伊勢・志摩と伊良

湖間の往来が可能になった頃からであると考えられる。

この祭りが史実として最初に明記されるようになったのは、7世紀後半、文武天皇の時代にまでさかのぼることができると言われている。しかし、このお糸奉献の儀式も、応仁の乱（1467年）の後、戦国の世となり、戦乱の影響を受けて一時中絶した。

明治34（1901）年、土地の人である渡辺熊十の努力により、献糸の行事が再興されることになった。お糸奉献の儀式再興までには十年近くかかったということで、渥美群内の八つの町村の応援を母体とし、渡辺熊十は、神宮司庁、愛知県庁、内務省と交渉に駆け回った。当時、伊勢神宮では私幣禁断の理由で、絹糸を神宮の神御衣祭用の御料としては受納できないと容易に受け入れてはくれなかった。しかし渡辺熊十の努力によって、再興が認められ、神宮から神官が派遣されて神殿が建設され、御料所が設けられた。そして現在まで、この一連の祭りは毎年続けられ、今年で87年目になるということである。

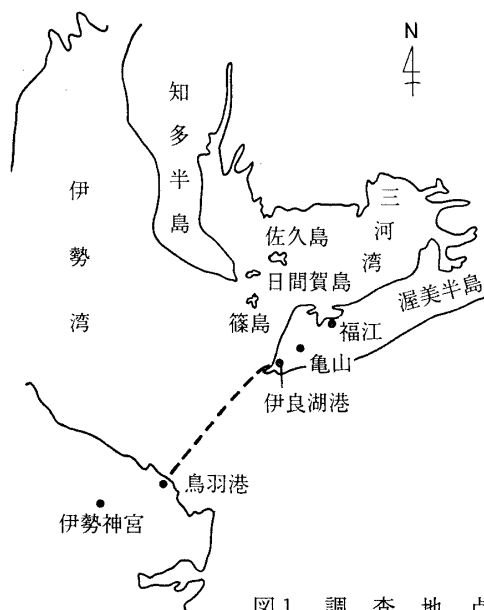


図1 調査地点

2. 繰糸祭について

(1) 繰糸始式と神職の装束

本年6月22日、渥美町亀山の神宮神御衣御料所で繰糸祭が行なわれた。この祭りは主催者、渡辺一夫氏を始め、神主一名、糸姫二名および地元関係者等二十数名によるひっそりとしたもので、まず御糸宮にて、赤引糸を採るための繭を神前に供える儀式が行なわれる。

午前11時、参加者全員が御料所長、渡辺一夫氏宅前に集合する。儀式の始まりの挨拶の後整列し、各自の手を清めてから御糸宮へ向かう。その後、繰糸始式の式辞がなされ、神職が宮内にて禊祓^{みそぎはら}いをする。（図2）

図3は神職の装束を示したものである。図3-(1)は、神職の最外衣として着する狩衣で、紫地に白の八つ藤紋が織り出された錦織りである。狩衣は、唐代に流行した胡服の系統である盤領^{まるえり}の上衣で、古く平安朝の昔から公家の間で広く用いられた狩猟用の略装であるが、明治以降、神職の祭祀奉仕の略服として着用



図2 繰糸祭始まりの挨拶

されている。狩衣の袖口に付けられている露紐^{くぐ}は、神事の際、腕の動きを考慮して、袖をたくし上げるための括り紐である。狩衣を着用する神職の位によって、一級から四級までに分けられ、上位の一、二級には平打ちの紐が、下位の三、四級には丸打ちの紐が露紐として用いられる。女性の神職の場合、すべて丸打ちの露紐が用いられるということである。緒袖^{はたそで}は、神に供物を献上する際などに手を覆い隠して、神に対する清浄さをあらわすために付けられたもので、神宮では指先まで覆い隠す袖丈となっている。男性の神職の装束は、正装、礼装、上装に区分

光センターの代表者などの地元関係者である。その後、神前に供えられた繭だけが下げられ、御料所長の手によって繰糸殿に運ばれる。

(2) 繰糸の儀式と糸姫の装束

繰糸殿において、繰糸の儀式が行なわれる。繰糸殿に使われる柱などの建築材料は、すべて伊勢神宮により譲り受けられたものが使用され、伊勢神宮の機殿が再現されている。繰糸殿において神職による禊祓いのあと、すでに神前に供えられた繭から糸姫二名により絹糸を引く繰糸の儀式が行なわれる。この儀式の中では、実際に繭から絹糸を引くことはなされず、繭をホウロウ引きの釜の中に入れ、糸を引く模擬行為がなされて儀式は形式化されている。(図5)

図6は、糸姫の装束を示す、図6-(1)は糸姫の^{びやくい}白衣であり。素材は木綿で女物袷長着の標準寸法で構成されている。

図6-(2)は糸姫の下衣として着する^{びやくこ}白袴である。これも素材は木綿で、行燈袴に構成されている。

図6-(3)は^{ちはや}千早を示す。糸姫は最外衣として木綿の千早を羽織る。千早とは、平安時代中期になって祭服や巫女の着る装束として用いられるようになったものであり、原始的な衣服で、貫頭衣の形式を残したものである。伊勢神宮で使用される千早は、

図7に示す通りであるが、御料所で現在着用される千早は、その形状・寸法について伊勢神宮のものと比較すると、脇が縫合されず、鰭袖がなく、裾が短い。また素材も伊勢神宮の絹羽二重の千早に対して木綿が使用されている。このことについて考察すると、御料所で使用される千早は、着用の時期が六月と暑く、繰糸は体を動かさなければならない作業であり、またその後、引き続いて行なわれるお糸船の行列においても、かつては数キロの道のりを歩かなければならなかったため、伊勢神宮の千早に比べて、より機能的な形態で、取り扱い易い素材の木綿が用いられたものと考えられる。これらの糸姫の白無垢の装束は、神に捧げる絹糸を採る際の糸姫の純粹、清浄な心を表現するものであろう。

実際に繭から絹糸が採られるのは、繰糸の儀式が終わったあとである。(図8)しかし伊勢神宮へお糸船で運ばれるのは、この時繰られた糸のほか、大部分は豊橋で機械紡績された絹糸が用いられる。この日糸姫になった二人は、繰糸祭で糸を繰って今年で三十数年を迎えるということであるが、かつては数名の糸姫により数日かけて糸を採り、現在より多量の糸を手で繰っていたということである。

図9は、大正10年頃(図9-(1))と昭和初期(図9-(2))の繰糸始式後の記念写真である。図中中央の髭の長い老翁が、繰糸祭由来の項で詳述した当時の御料所長、渡辺熊十である。氏

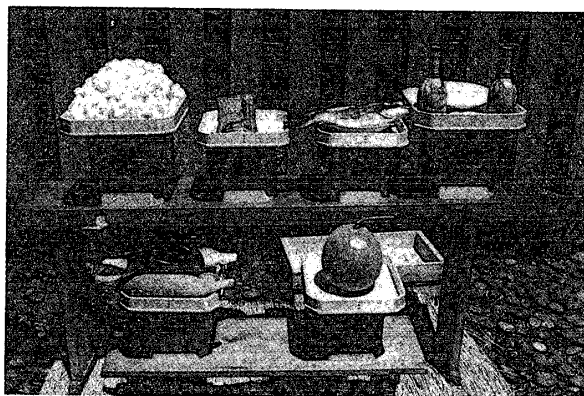


図4 神前への供物



図5 繰糸神事

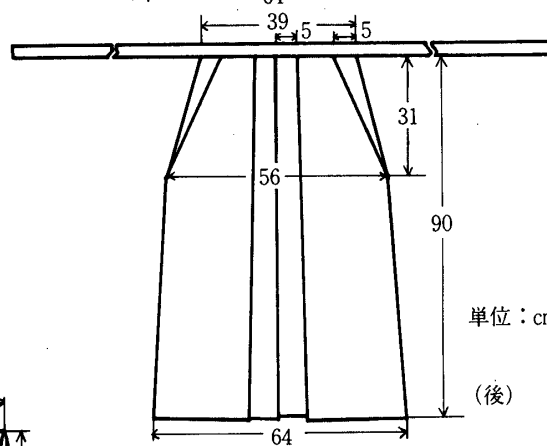
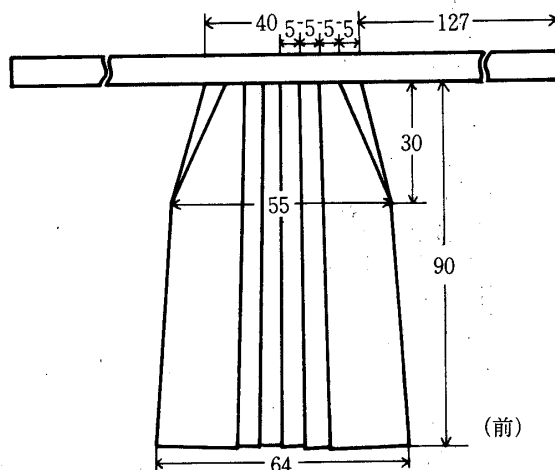


図6 糸姫の装束

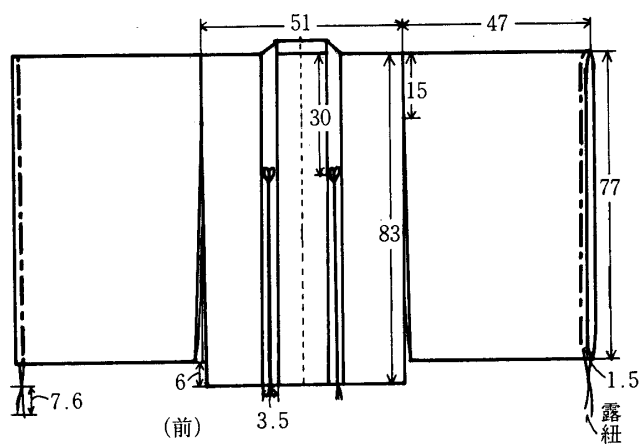


図6 糸姫の装束(下衣)

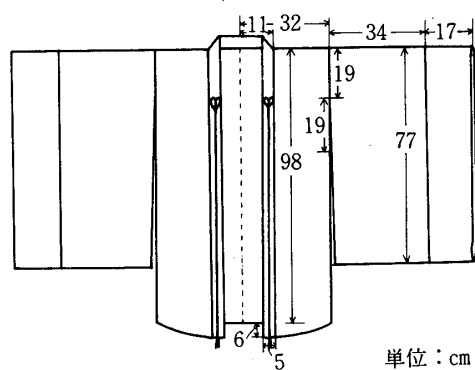
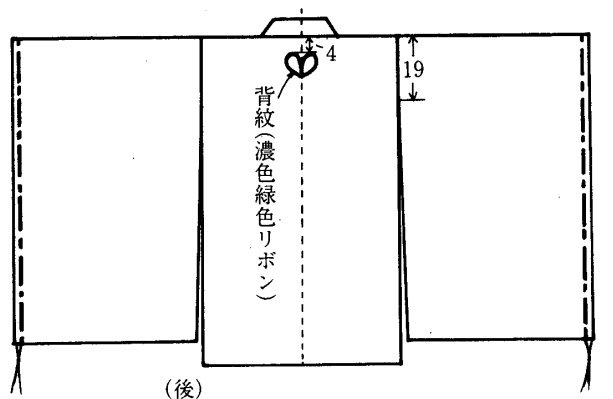


図6 糸姫の装束(上衣)

図7 伊勢神宮の千早

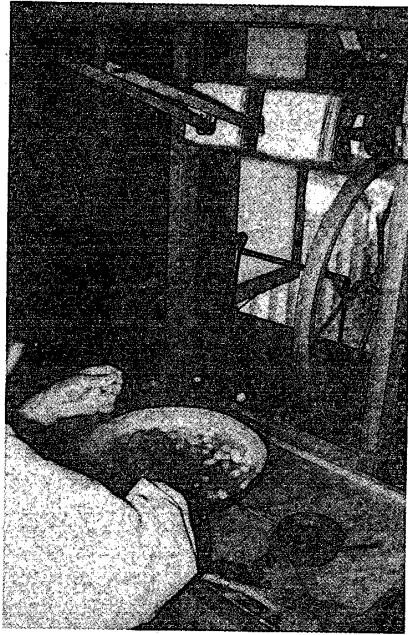


図8 糸姫による繰糸

は大正10年頃には、烏帽子、狩衣姿で笏を持しているが、昭和初期には黒紋付の羽織を着た和服姿である。しかし現在の御料所長、渡辺一夫氏は黒の洋礼服を着用している。神職の装束は、大正・昭和ともに変わらず狩衣姿であるが、被物に多少の変化がみられる。すなわち、大正10年頃には垂纓の冠を頂き、笏を持しているが、昭和初期には烏帽子に変わり、現在の神職の装束と同様となっている。また他の参加者は、大正10年頃には羽織・袴の衣裳であるが、昭和初期には軍服姿もみられ、当時の世相を反映していると言えよう。今日では、その参加者達も背広姿へと変化した。しかしこの中で現在まで変わらぬ装束を身に着け、古式の面影を留めているのは神職と糸姫である。

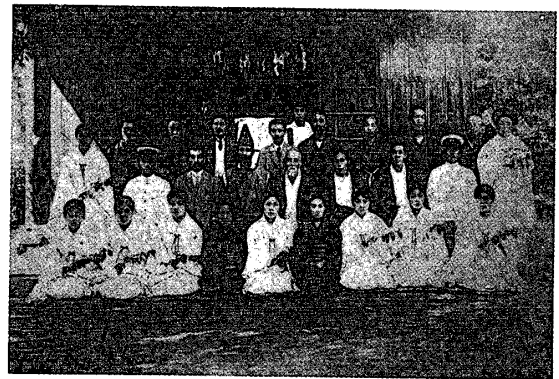
(3) 直 会

繰糸の儀式が終わると、御料所長、渡辺一夫氏宅において直会が開かれる。図10は直会での乾杯の様子である。神事のあと、御馳走や御酒を囲んで祭りでの労をねぎらい、久方振りに顔を合わせた人々は、仕事や家族の事など四方山話に花を咲かせるのである。本来、この直会とは神に献上した御食、御酒を人々が戴くことによって、神霊の分与にあずかり、神の霊威を人間の体の中に受け入れるという意味をもっている。そして元来祭りの基本構

成は、神に御食、御酒を奉る神祭り、神と人との交流である直会、そしてその後人と人との交流が行なわれる宴会とに分けられる。神祭りの斎行により、神の威霊は新鮮な活力を増し、そ



(1) 大正10年頃



(2) 昭和初期

図9 繰糸始式後の記念写真(渡辺一夫氏所蔵)



図10 直 会

の威力の増した神霊の分割にあずかるのが直会の本来の意味なのである。

ここで御料所長、渡辺一夫氏についてふれておこう。渡辺一夫氏は今年72才を迎え、繰糸祭を復興した渡辺熊十氏の孫に当たる。地元の人々には「絹神様」と呼ばれ、祖父・父の後を継ぎ、御料所長としては三代目で現在、繰糸祭およびお糸船神事を主催し、伝統の神事を守っている。

3. お糸船神事と装束

図11は、7月3日、伊良湖港にて行なわれたお糸船神事の様子である。この神事は、繰糸祭において繭より採った赤引糸を伊勢神宮へ奉獻する儀式である。伊勢神宮の方角に向けて設けられた祭壇には、唐櫃からびつに納められた赤引糸が供えられる。午前10時、参加者全員が祭壇の前に集合し、神職による祝詞があげられ、禊祓しづはらいがされて、伊勢神宮までの旅の安全を祈る神事が行なわれる。参加者は御料所長、糸姫二名のほか、繰糸祭の参加者をはじめ、地元の一般参加申込者百数十名である。



図11 お糸船神事

この神事において神職は、白の狩衣・指貫を身に着け被物は烏帽子、履物は浅沓を装着している。糸姫二名は、前項の繰糸祭と同装束を身に着け、他の参加者は黒の礼服の他、各自自由な服装である。

図12のように、赤引糸を神宮に奉獻するため、櫛くしを奉持する神職を先頭に、「大一御用、伊勢神宮、三河国」と書かれた神旗をはためかせ、また御料所長は「天照皇大神宮神御衣御料」と書かれた札を奉持して行列を整える。その後ろには唐櫃に納められた赤引糸を担いだ人々、糸姫二名、そして一般の参加者が続く。

図13は、「三州奥郡風俗圖繪」¹⁾の中に描かれた御衣御料奉送の図である。明治から大正にかけての光景で、時代の移り変わりがうかがわれる。先頭の五人の旗持は、昭和初期には姿を消していたと言われ、戦時中は唐櫃の担い手が白装束から、カーキ色の国民服を着た入隊前の青年に代わり、これが暫く続いたということである。神職と糸姫は現在でも、同装束を身に着けている。

その後「お糸船」に乗って鳥羽港へ向かう。翌7月4日、伊勢神宮で行なわれる赤引糸献納式のため、神宮司庁へ向かう。そこでお糸奉獻の儀式が行なわれる。御料所長の手によって赤引糸の入った唐櫃が手渡され、絹糸が献納される。図14は、その唐櫃の内部である。献納書の他、生糸四反分がこの中に納められている。

内宮の玉垣内での正式参拝の後、神楽殿において大神楽が奉納される。それが終わると昼食をし、再び海路で伊良湖港に帰り、お糸船の神事は終了する。

かつてこのお糸船の神事は半夏至の翌日に行なわれ、この日は当時農休みの日と定められていた。その頃になると、「お糸さんの時が来たね。」と言ひ交わされ、いつの間にかこの行事のことを「お糸船」と呼ぶようになった。そして土地の養蚕家百数十名が、この「お糸船」に同行したということである。



図12 お糸船に向かう

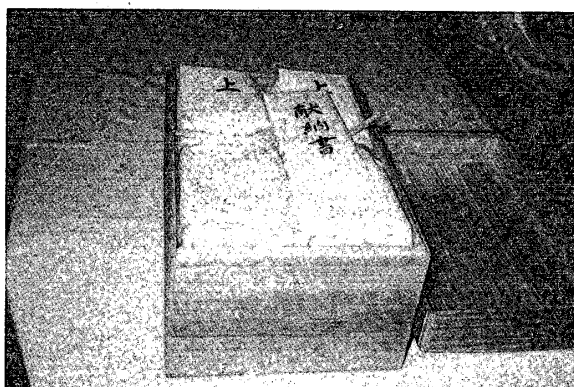


図14 唐櫃の内部



御衣御料奉送

図13 御衣御料奉送「三州奥郡風俗圖繪」

4. 祭りとくらし

東三河地方一帯は、かつて9割以上が養蚕家であったと言われている。すでに述べたように「延喜式」の中にも東三河が良質の絹糸を産する地方として記されており、古くから養蚕の盛んな地として有名であった。また明治期には、政府の殖産興業の方針も相まって、豊橋や渥美町には多くの製糸工場が設けられ、生糸の生産に力を注いだということである。繰糸祭およびお糸船神事は、このような亀山の古くからの土地の特徴を生かした祭りであると言える。しかし現在ではその面影をうかがうことはできず、第二次大戦前には一面桑畑であった亀山も、今はメロンやとうもろこし畑などに姿を変えている。

この一連の祭りのもつ意味について考察する。繰糸祭が行なわれる御糸宮には、天照皇大神が祭られている。この地方の生糸を伊勢神宮に奉獻する繰糸祭およびお糸船神事は、すでに述べたように、伊勢神宮で春と秋に、和妙（絹布）と荒妙（麻布）を縫糸、針などの縫製材料とともに神御衣としてお供えする神御衣祭に関連しており、和妙の材料となる赤引糸を献上する祭りである。人間が生活していくためには、衣・食・住の営みが満たされなければならない訳であるが、わが国における神に関する祭祀は、衣・食・住に関するものが大部分であり、その中でも衣に関する祭りは大変重要な位置を占めていると言えることができる。「古事記」の中に、「天照皇大神、忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめたまふ」と記されている。また「倭姫命世紀」には、垂仁天皇の御代に、「宇治の機殿を建て、天棚機姫神の孫の八千々姫命に天上の儀式にならって大神の和妙を織らしめたまふた」とある。このことから、衣に関する祭りが、神と人にとって重要なものであったことがうかがわれる。そして東三河地方の生糸を伊

勢神宮に奉獻する繰糸祭およびお糸船神事は、天照皇大神にその神御衣の材料である赤引糸を献上することにより、その土地の五穀豊穡、大漁を神に祈り、収穫を神に願う意味をもっているのである。

倉林正次²⁾によれば、古来日本人は衣を靈魂のシンボルとみなし、着物は人間の肉体を覆う用を果たすのみでなく、人間の靈魂を包むものであると考えられていたとしている。神にそのような靈魂のシンボルとみなされる衣の材料を贈ることは、自らの魂を神に捧げるのと同様の重大な意味をもっていたであろう。そしてこの一連の祭りは、渡辺熊十により再興されてから、亀山の特徵ある祭りとして、渡辺一夫氏らに引き継がれ、賑やかな祭りとは一味違った、古くからの伝統をそのまま現代に伝える祭りとして今日まで受け継がれているのである。

要 約

1. 繰糸祭およびお糸船神事の由来は、伊勢神宮へ神衣の材料を献上する儀式であり、7世紀後半より始まり、15世紀、戦国時代には中絶したと言われている。しかし明治34年、土地の人渡辺熊十によって復興され現在にまで至っている。

2. 祭りの装束については、神職は上衣として狩衣を、下衣は指貫を着用し被物は烏帽子である。狩衣に指貫の装束は、古く平安時代から公家の間で広く用いられた狩猟用の略装であるが、明治以後神職の祭祀奉仕の略服として着用されるようになった。神に捧げる絹糸を採る糸姫は、木綿の白衣に白袴を着用し、最上衣として木綿の千早を羽織る。千早は平安時代中期に祭服として用いられるようになり、原始的な貫頭衣の形態を留めている。ただし御料所の千早は伊勢神宮のものとは多少構成が異なり、より機能的に工夫されている。この白無垢の装束は、神に捧げる絹糸を採る際の糸姫の純粹、清浄な心を表現するものと考えられる。その他の祭り参加者の衣装は、時代が進展するにつれて簡略化の傾向を辿ってきたが、神職と糸姫の装束だけは現在に至るまで、古式の面影を留めている。

3. 祭りとくらしについて要約すると、「延喜式」にも記されているように、亀山の良質な絹糸を奉獻する繰糸祭・お糸船神事は、その土地の特徵を生かした祭りであると言える。かつ五穀豊穡、大漁を神に祈る意味をもち、衣に靈魂が宿るとする日本古来の信仰とともに現在にまで伝えられているのである。神事後の直会は、本来神に献上した御食、御酒を人々が戴くことによって、神の靈威を人間の体内に受け入れるという意味をもち、また一年に一度集まり、参加する人々のコミュニケーションの場ともなっている。祭りはこうして生活の折り目、節目としての役割をも果たし、観光開発のために伝統的な祭りを保存していこうとする動きが一般的である今日でも、この祭りは地域の人々の生活の中にその本義を忘れることなく、今も根づいていると言えることができる。

文 献

- 1) 松下石人：三州奥郡風俗圖繪，国書刊行会（1981）
- 2) 倉林正次：神の祭り・仏の祭り，佼成出版社（1981）
- 3) 倉林正次：日本祭祀研究集成，1，名著出版（1978）
- 4) 愛知県小中学校長会編：郷土の祭，愛知県教育振興会（1971）
- 5) 次田 潤：校註古事記，明治書院（1939）
- 6) 矢野永治：増補伊勢神宮，明玄書房（1978）
- 7) 森原 章：愛知・史蹟郷土史，講談社（1982）

- 8) 八束清貫：装束と着付け方，雄山閣（1928）
- 9) 山名邦和：日本衣服文化史要説，関西衣生活研究会（1983）
- 10) 神宮司庁：神御衣祭と機殿神宮（刊年不明）